

● 新潮社訪問

私の将来就きたい仕事は、まだぼんやりしている。本が好きだから本に関係する仕事がしたい。そんな薄ぼんやりした気持ちで、中学校の修学旅行で出版社を訪問した。そこは主に児童書や絵本をメインにしている小さな会社だった。幼いころに読んだ絵本はこうして作られていたのかと、いたく感動した記憶がある。もっと出版社を知りたい。去年の春から思っていた。それを叶えるべく、新潮社を訪問したのである。新潮社は、大人向けの文庫本が有名で、一番売れているシリーズも新潮文庫である。絵本ももちろん大好きだけれど、もしも将来編集者となるならば、雑誌や絵本ではなくエンタメ系の本を作りたい。そういった点で、この訪問は非常に有意義であった。

最初から簡単に訪問が許可されたわけではない。そもそも、私たちの班はお互い行きたい会社や大学が異なっていて、まずはそれを揃えるところから始まった。私は絶対に出版社に行きたいと思っていた。東京に行く機会などなかなかないし、さらに学校の後ろ盾によって訪問を頼めるなど願ってもないチャンスだったからである。出版社は学校行事でないと見学を受け付けていないところも多い。こういうチャンスを狙わなければまず見学できないのだ。私の念願がかなって、この班は出版社を見学することに決まった。

新潮社は、訪問を受け付けていない企業だった。中学生のころに打診したことがあるから分かっていた。だから、最初は他の出版社にお願いした。しかし、なかなか定まらない。人気がある職種だということも1つの理由だが、多くの会社が小さいということもあった。出版社は激務である。人手が少ないのに、高校生なんかに関わっている暇などないということも、十分頷ける。しかし、私たちは訪問させてもらいたかった。期限が刻々と近づくなか、もう半ば諦めて、新潮社に連絡をしたのである。私は、新潮文庫が好きだ。紙の色、質、スピンなど、どっしりとしていて好きだ。それが作られる現場を見てみたかった。受け付けていないということを承知しながらも、どうせ駄目ならばと話してみたのだ。言葉1つで結果が変わる。電話でのやりとりは必死だった。嘆願の末、訪問が許可されたときは飛び跳ねるほど嬉しかった。というか、実際飛び跳ねた。この校外学習のなかで一番楽しみであった。

当日は、早めに会社に着いた。迷い迷いでヒヤヒヤしたのだが、約束の10分前には辿り着けて、ほっとしたのを覚えている。受付で待機するように言われた後は、胸がバクバクしていた。通り過ぎる社員のみなさんがする会話が、正しく憧れだった。

「〇〇先生の新刊、映画と同時発売できますか？」

「校閲の△△さん、どこいきますか？締め切り近いから言っとかないと……」

自分が出版社にいるのだと、肌身で感じた。わくわくして仕方がなかった。

私たちに対応してくださったのは、取締役の方だった。緊張すると同時に、どんなことでも答えてもらえそうで、ますます心が沸き立った。

「本を買ってもらうために、どのようなことをしていますか？」

最初にした質問がこれだった。

「私たちは、自社の本の面白さに自身を持っています。だから『もっと本を身近な存在』にするキャンペーンをしています」

新潮文庫の百冊。書店に行けば手に入る小冊子だ。それを私たちに配って、取締役の伊藤さんは話を続けた。

「これは、ガイドブックなんです。普段あまり本を読まない人は、なにから読んだらいいかわからない。そういう人に、本を手にとるきっかけとなってほしい。百冊でもまだ多いでしょう。だから、恋の話、泣ける話、という風に、さらにジャンルごとに整理してあるんです」

新潮文庫の百冊には、キャラクターのキュンタくんがいる。彼はロボットだ。人間の心がわからない。人間の心を知る方法で一番良いのはなんだろう？それが、本を読むことだ。新潮文庫の百冊には、この小さな話に沿って本が紹介されている。ストーリー仕立てにすることで、ますます興味を持ってもらおうとしているのだと、伊藤さんは言った。

「コンテンツを世に発信するときに気をつけていることはなんですか？」

「読者の目線です」

作家という存在は、出版社にとって大切だ。しかし、読者の存在も大切だ。読んでくれる人がいなければ、出版社は成り立たない。何事も読者の目線で、作家と読者の間でバランスを取ること。大変なのだと言っていた。

「やりがいや、辛いことはなんですか？」

「まずはやりがいですね。これは、なんととってもファーストリーダーになれることでしょう」

ファーストリーダー。その原稿を初めて読む人のことだと、伊藤さんは教えてくださった。作家以外まだ誰も読んだことがない作品。それを、いの一番に読める。これ以上に素晴らしいことがありますか？ときかれたときは、羨ましい意外に何も言えなかった。

「それにですね、本にもその時代に合わせて、売れるものとなかなか売れないものがあります。時代の風を読んで、私たちは本を出します。見事世の中の流れに乗った本を出せたときは、とても気持ちがいいんですよ。『時代をつかんでやったぞ！』って気分になります」

流行や雰囲気、それを掴めたときの喜びは何にも勝るそうだ。

「辛いことは、もちろん本が売れないことですよ。それだけではなく、意見の調整も苦しいところではあります」

先述した通り、作家と読者の意見の調整は編集者の役割だ。それに加えて、会社の上層部と作家の意見をすり合わせることも多い。対人関係が大変だというのはどこの職場も同じなようだ。

「でもズレを恐れてはいけないんだ。自分を信じることが大切だよ」

それから、この仕事に限ったことではないけどね、と伊藤さんは前置きしてから言った。

「困難なことを乗り越えるには何が必要だと思う？それはね、仲間なんだ」

例えば友人、家族、同僚、上司、部下。自分の味方になってくれる人間がいることは、問題に立ち向かう上で、この上なく心強い。

また、「コーシャス・オブティミズム」という言葉も教えてもらった。慎重な楽観主義、という意味だそうだ。人事を尽くして天命を待つという少し違うけれど、物事を全力でやり切ったあとは、楽観的に構えていればいい。この話は、今回一番印象に残っている。

「出版社に入るにはどうしたら良いですか？」

個人的には、1番これが知りたかった。話を聞けば聞くほど出版業界への憧れが大きくなる。この機会にきいておきたかった。

「当たり前ですが、本を読んでください。取り扱う商品について、よく知っていなければならないのは当然です。それに加えて、武器を持ってください」

武器、とはなんなのか。

「例えば、英語が得意だとか、この時代についての知識は誰にも負けないとか、そういうことでいいんです。自分と他人の差をつけるには、ときに武器は1つでは足りません。できれば2つ、誇れる武器を持ってください」

私には、どんな武器があるのだろうか。人と差をつけられる特技はなんだろう。出した答えは「無い」だった。人並み外れた才能も、誰より熱く燃える情熱も、私は持っていない。

だったら、武器を作るしかない。少しでも得意だと言えること、好きだと胸を張れることを、どんどん伸ばしていくしかない。大学より先を見据えて、今から努力を始めたい。そう決心した日になった。

たった1時間しかいらなかったけれど、その中で感じたこと、学んだことは山のようにあった。出版業界について、人生について、社会について。この経験は、将来必ず役に立つだろう。例え私が出版の道に関わらなかったとしてもだ。新潮社を見学できて、本当に良かった。心からそう思う。